とよたち

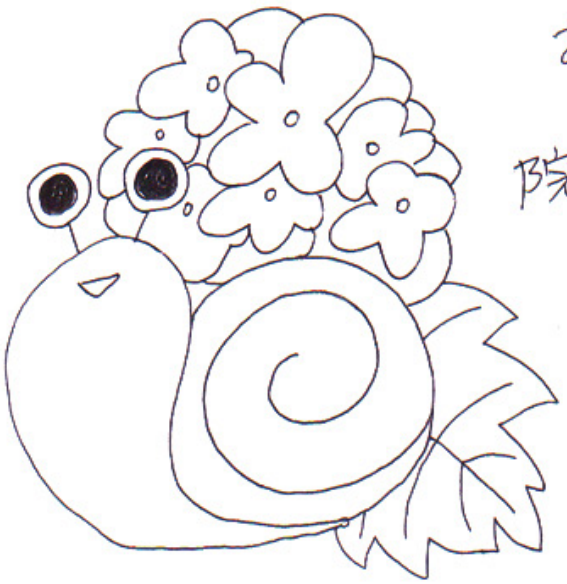
美肌通信6月号

Vol.119

沼尾執郎

June

今月号のとよたち美肌通信
6月号の表紙は、
富士山の近くをきもちよさそう
に走るかっこいい新幹線の
絵です。
スポーツを見る事が趣味で、
サッカーをする事が得意な男の子
が描いてくださいました。
ありがとうございます！



院長はじめ
スタッフ一同
心より感謝いたします！

この「とよ・たち美肌通信」は6月号ですが、この号は令和2年3月28日土曜に書いたものです。

3月25～27日までの3日間で東京都では連日一日の新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の陽性者が40人を越え、3月28日には63人となったことを発表した。又、これに先立って都知事は3月28日及び29日の外出自粛を要請したのだが、今後感染爆発が起こる可能性は想像に容易い（令和2.3.28現在）。

もし感染爆発が起こってしまえば、当クリニックの外来診療をその局面毎に適切に対応していかなければならない。また一方では、職員の生活や健康を考慮しなければいけない経営者として、職員を感染から守らなければいけないというのも事実である。

私は、2012年2月の本紙である文献を引用しこう述べている。

中国春秋時代に斉国の威王と魏国の恵王が偶然狩り場で出会った時の会話だと言われています。

恵王は威王にこう語りかけました。

「私の国は小国だが他国にはない立派な宝物がある。それは強い光を放つ珠で、車の前後十二乗

分まで照らす珠が十枚もある。貴国にはどんな宝がありましょうや？」それに対し威王はこう答えました。
「私の国にはそういうものはありません。しかし優れた家来がいます。ある家来に城を守らせたところ隣国楚は恐れて攻め入らず。ある家来に砦を任せたところ、趙は黄河で漁をしなくなった。こうした家来が自分の持ち場で一隅を照らし、国を支えてくれている。これが私の宝です」、威王はそう言いました。
つまり強い光を放つ珠十枚が国宝なのではなく、一隅を照らす者が国宝なのだと。その後この話は日本において最澄が『山家学生式』という書物にまとめている。「古人曰く、径寸十枚、これ国宝に非ず。一隅を照らす、これ則ち国宝なり」と。論語を研究しておられる伊與田覺先生によれば、「一隅を照らす」というとちっぽけと思われるかも知れないが、自ら光り周囲を照らすことは甚だ深い意味があると話されています。

これは私個人的な予想ですが、COVID-19による感染は今後急速に拡大していくものと思ってしまいます。

その非常時にあっても、当クリニックは患者様が受診される上で安全であり続けなければならないと考えております。それと同時に当クリニックを照らし、常に支えてくれている職員を守るのも私の役目であります。従って間もなく4月に入る訳ですが、COVID-19感染症の動向を日々注視しながら、進取にしてかつ剛毅果断(ごうきかだん)に対処していかなければならないと思っています。

しかし理想的には、患者様の目に留まる6月号の「とよ・たち美肌通信」の時にはCOVID-19感染症が「終息」せずとも「収束」していることを望わずにはいられない。

院長，拝